

[巻頭言]

情報システム学の新しい展開

芳賀 正憲

浦昭二先生は、本学会設立にあたり、情報システム学を次のように定義されている：

「世の中の仕組みを情報システムとして考察し、その本質を捉え、そこに横たわる問題を究明しそのあり様を改善することを目指す」実践的な学問である。

周到に考え抜かれた、見事な定義であり、その高い価値、深い意味が、時とともに明らかになってきている。

定義では「世の中の仕組みを情報システムとして考察し・・・」とある。しかし、もともと世の中の仕組みを考察してその本質を捉えようとしていたのは、他の多くの学問分野、哲学、心理学、言語学、文化人類学、社会学、経済学、経営学、生産工学、等々であったはずである。それでは、これら既存の学問分野と新しい情報システム学は、どのような関係にあるのだろうか。

従来から情報システム学には、参照領域という考え方があった。参照領域とは「その分野をしっかりと学ぶことにより情報システムの研究の質を高めることができるようなもの」で、従来の知見では、上記したような多くの分野が挙げられている。

しかし浦先生の定義「世の中の仕組みを情報システムとして考察し・・・」において、もともと世の中の仕組みを考察していたのが他の多くの学問分野であることを考えると、新しい情

報システム学は、多岐にわたる学問分野を、参照ではなく、情報とシステムの観点で抽象化し、本質モデル化、すなわち“深層学習”したものであり、情報システム学は他の分野に対するメタ学問であると位置づけることができる。

一方、米国のコンピュータ関連の標準カリキュラムでなされた提言：「多岐にわたる分野やプロセスに、共通に横たわり専門分野を深いレベルで統合する助けとなる重要な考え方や原理がある。これを再起概念（再帰ではない）と名づけ、全体像を理解するには、まずこれを学ぶ必要がある」にしたがうと、情報システム学は、多岐にわたる学問分野の再起概念の体系であると見なされる。

情報システム学を他の多くの学問分野の本質モデル、メタ学問、あるいは再起概念の体系に位置づけると、今度は逆に、情報システム学を参照基準にして他の学問分野のレベルアップを図っていくことが可能になる。また、広く学問分野の共通言語として、多くの分野がコラボし、ともに発展していくためのプラットフォームにすることができる。

例えば、人々の生活に直結する経済学に対して、情報システム学は重要な指摘をすることができる。一般に経済学はマクロ経済学、ミクロ経済学の枠組みで考察されているが、わが国のマクロ経済の規模を考えると、サブシステムに相当するメゾ経済学概念、理論、政策論の体系を構築することは必須のことと思われる。

また、経済学者は、分権化市場経済、集権化計画経済、それぞれを研究し主張する、大きく2つの派に分かれている。情報システム学的に

Masanori Haga

情報システム学会 評議員

[巻頭言] 2016年9月5日受付

© 情報システム学会

は、分権化市場経済、集権化計画経済いずれも本質モデルであるが、経済学者は両派とも、本質モデルが2つ存在することの意味を理解せず、それぞれ排他的に研究し主張し続ける傾向がある。

“凝集度は高く、結合度は低く”は、メインフレーム段階のモジュール分割の原則から生まれた、あらゆる組織の分割基準として適用が可能な再起概念である。しかし多くの経済学者にはこのことの認識がなく、世界経済をゆるがすサブプライム問題が起きたときも、本質的な

原因の追究ができなかった。

経済学について例を挙げたが、今後さまざまな学問分野の人たちとコラボして問題点を解決し、学問の発展に寄与していくことが、情報システム学会の重要な使命になる。情報システム学が学問としての地位を確立し、他の多くの学問分野を牽引しながら世の中の仕組みを発展させていく、新しい時代が始まる。多くの優れた人材が情報システム学会に結集し、活動して下さることを願っている。